

# さらば北辺のカモメ

作／鐘下辰男

プロローグ

遠く、かすかに電話の時報（二ノ時報）と共に、陽気な街の雑踏——クリスマス・イブの夜。

突然の暗闇——響き渡る悲鳴——。

やがて圧しつぶすような静寂……。

圧しつぶすような静寂が続く中、やがてポタリポタリと水が滴る音……それはキッチンの蛇口から漏れる水がシンクを叩く音……それと共に、そのキッチン横に鎮座する白い冷蔵庫がぼんやりと浮かびはじめ……。

ケン 起きろ——！ ニッポン！

アッコ 太陽が昇るまで、

ケン 眠れないあんたにお付き合ひ、

ケン  
ケント、

アッコ  
アっちゃんの、

二人  
チョベリグジョッキー・オールナイトロング〜！

その冷蔵庫上にあるラジオ（80年代型）が突然騒ぎ出すと同時に、徐々にむき出しのコンクリートで塗り固められた一個の冷たいCUBE内の全容が見えてくる……。

そこは何者かが格闘した後のように、テーブルや椅子は散乱し、表面がコンクリートのザラついた感触が露出している壁には、所々、鮮血も飛び散っている……。

ケン  
メリー・クリトリス、

アッコ  
◎◇※■（言葉にならない声）！　なんで!?　聖なる夜が汚れるですよ！

ケン  
今日はセイ（性）なる夜でしょ？

アッコ  
セイ（聖）なる夜！　みんな素敵なクリスマスを過ごしてるの、つて  
うかサントさんに謝って、

ケン いないもんにどうやって謝まんの？

アッコ ケンちゃんには見えないだけ。サンタさんはいるのホントウに。

ケン アっちゃんには見えてるの？

アッコ ナイシヨ、

ケン ダヨネー！ いつも肝心なところはそれダヨネー！

アッコ マイツカー、

簡易ベット、フロアライト、レコードプレーヤー、電気ストープ。中央にはテーブル。一隅には電話台。その上には黒いダイヤル式の黒電話とカレンダー（十二月のページになっており毎週金曜日のところには印がされている）、一冊の文庫本（『カモメのジョナサン』）。電話台の横の椅子には一体の人形。全身を映し出すことのできる鏡（姿見）。壁には、ジョン・レノン&ヨーコ・オノの「未完成、作品第一番」トウ・ヴァージンズの「ジャケットデザインがひきのばされたポスター」と、不気味な両眼を左右に揺らし時を刻み続ける梟時計。

この殺風景ともいえる室内にある、ただ一つ扉であるが、それは外へと通ずるものではなくバスルームへのそれである。扉が開いた時は、淡い乳白色の室内灯に照らされシャワーと浴槽がわずかに見えるが、このバスルーム内だけが、他と違い妙に生々しい現実感がある。

フロアライトに照らされた床面には、水の入ったバケツと、なにが入っているのか黒い大きなゴミ袋……。

そして、そのCUBE内の一隅に一人の女……。

メガネをかけたその顔や衣服の所々にも血痕……。

ケン

というわけでみんな、アっちゃんの都市伝説コーナー行くまえに、まずは白いカルピスぶちまけろ〜！これがほんとのホワイトクリスマスス〜、

アッコ

◎◇※■！ それしかないのケンちゃんは、

ケン

メリー・クリトリス〜

アッコ

メリー・クリスマス！

女はラジオを消す——ふたたび押しつぶすような静寂……。  
女はメガネを取り、床に投棄されている包丁を拾い上げる。

女  
……。

なんの拍子か、椅子に置かれた人形が突然床に転がり落ちる。  
幻聴のように聞こえるカモメが飛び去る音——そして室内を  
覆うように一陣の風——それは遠く北国の偏西風……。

女の声 「雪って不思議」

男の声 「…、なにが？」

女の声 「だって思わない？ カミサマは、なんのためにこんな……、だって  
雨はわかる、必要だって。でも雪はどうして？」

どこの風景を模したのか、美しいジオラマが見えてくる……。  
広い雪原の中央付近にポツンと一軒、小さな納屋の立つ風景。

男の声 「鈍らないためぎ、カンカクが」

女の声 「カンカク？」

男の声 「ニンゲンとしての……、だつてほら、雪を見てると、なんか感じる

だろ」

女の声 「なにが？」

男の声 「なんか…、ア—つて」

女の声 「(小さく笑う) なにそれ？ ……カンカクを感じる？」

男の声 「うん…、カンカクをね……。ア—つ、て……」

妻 なんて黙ってるの。

「妻」……。

妻 わたしは話し合おうって言ってるの。大間違い。いつまでも続くだ

なんて思っているならこんなことが。なんとか言ったら。

……、

女 ならうちの人を出しなさい。(バスルームを示し)そこにいるのはわ

妻 かってる。

……、

妻 (バスルームに向かって) あなた。ワタシはどうしたらいいの？ 聞  
こえてるんですよ。ワタシはどうしたら？ 答えて！

女 —— (妻に包丁を構えた)

妻 ——！

CUBE内に響き渡る、「妻」の悲鳴——、

バスルームの扉が開け放たれ、タオルで口と鼻を塞いだ裸足の男が出てくる。女同様に、やはり衣服等には血痕……。

男 (びつくりしたように女を構える見つめている)

「妻」の姿は消えている……。

男 …… (包丁を受け取ろうと手を差し出す)

女 …… (動けず)、

(歩み寄り、女から包丁を——)

女 —— (包丁を床に投棄し、メガネをかけベットへ)

男 ……、

男は女が投棄した包丁をキッチンへのシンクへと投げこむ——

―響く金属音―男はキッチン灯を点け、蛇口をひねるとそこから流れ出る冷たい水を頭から浴びる。

飛び散る水が、フローリングの床を濡らす……。

女は駆け寄るようにして開け放たれたままだったバスルームの扉を閉めた―音に驚いたように男……。

女　ごめん(驚かして)……(床に落ちた人形を拾い上げ、椅子に座る)

男は上着とシャツを脱ぎ、黒いゴミ袋へと投棄しようと……ふと思い出し、上着のポケットから煙草の箱を取り出すが、無情にもショートピースは空らしく、その箱を握りつぶし、衣類と共にゴミ袋の中へ。

男　(女に) 煙草……、ある？

女　(わたしのは) 軽いわよ。

男　いいよ、

女　(セブンスターを男へ)

男はマッチで火をつけるが、一吸いしてフィルターを引きちぎり両切り状態にして吸いはじめる……男の吐く紫煙がCBE内を浮遊する……それはまるで小学生の頃に見た、オカルト雑誌に描かれたエクトプラズム……、

女 買ってこようか？

男 ん？

女 煙草、

男 いいよ。

女 それしかないの。

男 いいって。それより爪切りない？

女 え？

男 爪楊枝でもいい。

女 (男に渡す)

煙草を吸う時に気づいたのだらう爪の間に染みているソレ、を神経質そうに爪楊枝で取り除こうと……それはうまくいかず、

爪楊枝をキッチンのシンクへと投棄。

男 (軽く笑つて) 無理にでも最初に浴びておくんだつた、こんなことな

ら、最初に。

え？

…、シャワー。

…、(ベット脇の小箆筒からシャツを男へ)

…、

(男の胸元へ放り) 風邪ひくわ、

(そのシャツを羽織り、陽気につとめようと) さあてと…、どうする

(?)

女 大丈夫、(その床を示し) ちゃんと拭いたわ。

男はふとなにかの気配を感じたように、台所のキッチン灯を  
消した――。

女 …、なに？

男 ……ごめん。気のせいだ、

男はキッチン灯を点灯させるが——ふたたび消灯。

女 ……、

押しつぶすような静寂の中、かすかに聞こえて来るこの〇〇  
田外を歩く足音……それはゆつくりとコンクリートをたた  
くコツンコツン……。

やがて遠ざかる足音……動くは男の吐く紫煙と、時を刻む梟  
時計の両眼のみ……。

女 きつと隣。いつも遅いから、帰り。

…、（ふとカレンダーを見やる）ね、もしかして今日って（？）

……、

男 何時だっけ？ 来るのいつも。

女 今日は大丈夫、

男 (カレンダーを示し) 金曜日 (自分が身につけているシャツを示し)  
来る日だろ、タニオカが、  
女 今日はクリスマススイブよ、  
男 だってついてんだろ印が、  
女 どんな男だって家族と一緒に、クリスマスなんだから、  
男 だからついてんだろって印が、  
女 電話が来たの行けないって(！)  
男 ……、  
女 (大きな声を出して) ごめん、  
男 本当それ？  
女 昼間…、電話があつたの、  
男 だっていきなり来るとか、気が変わって、  
女 そんな人じゃない。  
男 ……、(必死に思案するようにカレンダーを見る)  
女 次の金曜はお正月。奥さんの実家。彼毎年そうだから。  
男 いいぞ。(女にカレンダーを示し) だよね？  
女 ……、

男 まるまる二週間だ、次来るまで。だろ？

女 どうするすの？

男 どうするって？

女 ……、

男 (バスルームを示し) だって置いとけないだろこのまま、

女 (煙草を吸い出す) ……。

男 ……ね。言つとくけどぼくはこれっぽっちもないよ。あんな奴のせい  
ですべてがお終い？ 冗談じゃない(！)

女 やったのはあたし。あなたじゃない。

男 ……誰がやったか、(そん)なことは問題じゃない。今重要なのは、  
ここからどう運び出すかだ。

女 臭いとかどうするの。

男 え？

女 だって臭うでしょうそのうち。気づかれるわ外に。

男 (イライラを抑え) 今は冬だよ。

女 ……、

男 (電気ストーブを消す) ど(？)

女  
(応えず)

男は尚も冷凍庫をあけ、氷を取り出しボールへ入れると、バスルームの扉を開け、浴槽に横たわるであろうソレにぶちまける――。

男  
ど？ なんなら塩もまこうか？ 塩は氷点を下げる。もつと冷える。

ど(！)

……。

男  
(独り言のように) 我慢だよ。たかが臭い。それに人間の嗅覚つてのは慣れるようにできてる。最初だけさ。第一、運び出しさえすりゃあ……、時間はあるんだ。(カレンダーを示し) 二週間。クリスマス万々歳だ、

女  
そのうち固まるわ。

男  
あ？

女  
言うでしょ死後ナントカって、

男  
だからどうなるかじゃない。どう運び出すか、

女 何かに入れるにしても固まったら無理でしょ、運び出そうにも出せないでしょ、

男 (女を制して) …、(旅行用のトランクを手にし) こいつだ。

女 ……、

男 もっと大きいのないの？ 大きけりゃ大きいほどいい。

女 ……。

男 じゃ明日買いに行こう。大丈夫。あんなだけ血が出たんだ。そんなすぐには固まらない。朝一で行けば間に合うさ。

女 なんで血が関係あるの？

男 なんてって…、あれは血が固まるからだろ？

女 肉自体が固まるんでしょ？ 血なんて関係ないでしょ？

男 (イライラと) どういうこと？ 肉ジタイ？ おかしくない？ ニクジタイ(!?)

女 筋肉、筋肉が固まるの、

男 じゃなに？ 筋肉質だと早くてブヨブヨしてる奴だと遅いつて？

女 知らない、

男 言つたる。どうなるかじゃない、どうするかだ(！)

女  
男  
……、  
(同時に) 専門家じゃないんだからあたしだって!

女、椅子に坐りこむ……その小さな肩がかすかに震えている。  
男はキッチンへと行き、グラスに水を注ぎ女へ。

男 ……、ごめん、  
女 (首を振る)  
男 いいから飲めって、  
女 (動かず)

男は女の手を取り、無理やり飲ませようと、女はそれを払う  
——壁に当たったグラスが割れる——。

壁の梟時計が零時の時を打ち鳴らす——十二回……。  
二人、しばし動けず……やがて女はグラスの破片を拾い、キ  
ッチンシンクへと投棄——その目に入るのは、男が投棄し  
た血で汚れた包丁……。

女、蛇口から水を出し、シンク内にある包丁の血を流し取る。

女 (蛇口を閉め) 葡萄……、(明るく) ね、葡萄食べる？

男 ブドウ？

女 実家が山梨なの、タニオカさんの。毎年時期になると送ってくるんだ  
つて。

男 …、今は冬だよ。

女は冷蔵庫を開け、その冷凍室の中から半透明のタッパを取り出す。

女 傷んだりしないでしょ、これなら。

男 ……。

女がテーブル灯を点灯しタッパを開けると、中には冷凍された葡萄(巨砲)の粒……。

女 向こうじゃ子どもの頃とか食べるんだってみんな。北海道だとジャム  
かワインとか（でしょ）？ あるのよ。地元には地元なりの食べ方が。  
男 ……、

女は男をテーブルの椅子へと座らせる。

女 （一粒取り上げ）最初は餡みたいに固い。でも口の中にいれてね、舌  
で転がすように……すると皮がきれいに剥けて、あとは中身を、シャ  
リシャリって……、

女は一粒口の中へ……やがて男に口を開けて見せる。

女 ど？ 口の中で溶かすだけ。  
男 ……、

女が男の口の中へ葡萄を入れる。

男 ー (つめたい)、

女 噛んじゃだめよ。我慢するの。舌をうまく使って、口の中で少しずつ暖める……、

男 (試みる)

女 (笑う)

女は一眼レフカメラを手にして男に向ける……。

女 (ファインダーをのぞきながら) きれいに皮を剥いたら、はじめて食べるの。シャリシャリって。そしたら、嘘みたいに消えてなくなる。まるで、雪みたいに……。

男 (口を開けて見せる)

女 (シャッターを切る) ……、そ。うまいわ。ー (気づく)

男 なに？

女 (シッ)

かすかに足音……ふたたびゆつくりとコンクリートを叩くコ

ツンコツン……。

男はテーブル灯を消す——暗転。

暗闇に響き渡る足音——やがてバスルームの扉が開かれ、「妻」が出て来る——。

タイトル——『さらば北辺のカモメ』

CUBE 内にはまるで浮遊するかのよう「妻」（以後、彼女はこの室内に存在し続ける）……メガネを外した女が鏡（姿見）を見つめている（女には「妻」は見えてない様子）。

椅子には先ほど女が男に渡したシャツがかけられている。バスルームの入口にはトランク。わずかに開いた扉の隙間からは時折ガムテープが引き延ばされる音——やがてなにかに滑ったのかバスルーム内で転倒音——女はメガネをかけ、バスルームを見る——口と鼻をタオルで塞いだ男がふたたびバスルーム口に現れる。

男　ね。ちよつと、押さえてくれない？　足、開かないように。

女　……、

男　大丈夫、動きやしないんだし。

女　（立ち上がる）

男  
滑るから気をつけて。

女は男と共にバスルームの中へ……バスルーム内に響く、男  
と女の声……。

男の声  
（ことさら陽気に）しかしあれだね。血つてのは意外と出るもんなん

だね。あんなに出たのにさ。

女の声  
早く（はじめよう）、

男の声  
…、後ろから、抱えるみたいにさ。ぎゅつと。

女の声  
…、こ？

男と女の荒い息づかいと響き渡るガムテープの音——やがて  
男がバスルームから出て、戸口に置かれたトランクとソレを  
見くらべる風……。

男  
（バスルーム内に）もう少しならんかな、小さく。

女の声  
こんなもんじゃない？

男はふたたびバスルーム内へ……。

男の声　ちよつと背中押してくれる？

女の声　なんで？

男の声　両方から押すんだよ。お腹ん中の赤ん坊みたいに。ね聞いている？

女の声　（移動する風）早く、

男の声　せいのでいくよせいので。二人で一緒に、息合わせて、

女の声　いかないわよもうこれ以上、

男の声　だからせいのだよ。せいの――。もう一度。せいの――。そのまま手

伸ばして、足抱えこんでそのまま（！）

女の声　え？

男の声　後ろから抱えこむの、おれ押さえてるから、

女の声　早く、

バスルーム内に響く、ガムテープの音――。

男の声　ちよつとお腹引いてくれる？

女の声  
え？

男の声  
下半身に力入れて、お腹ゆるめるの、

女の声  
力入れてゆるめる？（意味がわからない）

男の声  
入れたいの手を、ここに、

女の声  
入れて早く、

男の声  
だから力抜いてさ、

男の声  
だから入れてよ早く（！）

バスルーム内に響く、ガムテープの音――。

やがてバスルーム内から飛び出るように出て来る男と女。

女は血で汚れた上着を脱いで黒いゴミ袋へ――。

男  
……、ど。（タオルを取り）これなら固まっても運びやすい。

女  
…、うん。

男  
どっち（？）

女  
いいと思う、

突然カツンカツン……それはだんだんと近づいてくるようである。女は音をたてぬようにして、室内の明かりを消す。  
CUBEの外で止まった風……。

女 気づかれたんじゃない(?)

男 なが、

女 悲鳴とか、大きかったしかなり、

男 タニオカじゃないのか？

女 だからそんな筈ない、

男 なんで(!?)

女 電話があるもの彼なら。それにあれは男じゃない。女よ。女の足音。  
細いヒールがコンクリートを叩く音……、

やがて遠ざかっていくカツンカツン……静寂……二人、動かない——。動くのは室内をただ浮遊する「妻」のみ……。

先ほどから男にだけはこの浮遊する「妻」の姿が見えるようであるが、男はそれを女に覺られまいとしている。

梟時計が、午前二時の時を打ち鳴らした――。

男はトランクをバスルーム内へ入れようと……女は動かない。

男 やれることはやっちなおようよ、今のうちにさ。

女

――！

女、キッチンのシンクへと走り――嘔吐……蛇口を開き自身の嘔吐物を流す女――。

男は諦めたように、顔や足などの血を神経質にタオルで拭き取り、それらをゴミ袋へ入れる。

暖房は切つてあるため、室内は寒くなっている。

男はラジオをつける。(D1と同時に芝居は進行する)

ケン

ダヨネー！ いつも肝心なところはそれダヨネー、

アッコ

マイツカー、じゃなくてこれは本当の話、都市伝説なんかじゃないの。

ケン

教えて教えて。

アッコ

むかーしむかし。とつても寒い国にセント・ニコラウスという若者が

いました。ニコラウスは子どもの頃からとても貧乏で、人から物を貰ったことなんて一度もありません。ある日彼は、雪の降る中立ち尽くす捨て子の少年を見つけました。可哀そうに思ったニコラウスは、自分の家に連れて行こうとしましたが、少年の足は、なんと寒さのために動かなくなっていました。困ったニコラウスは、自分の靴下を少年に履かせてあげました。すると少年の足はその靴下で暖められ、歩けるようになりました。少年はこの魔法の靴下を貰い大喜び。ニコラウスもそんな少年を見てとても嬉しくなりました。それから二人は、まるで親子のように仲良く暮らしましたとさあ。

ケン

アッコ

どこがサンタクロースとつながるの？  
続きがあるの。仲睦まじく暮らしていた二人でしたが、やがてニコラウスは年老いて死んでしまいました。一人遺された少年は考えました。あの雪の夜、足が動けず歩けなかった自分、そしてそのとき貰ったあの魔法の靴下。それを思い出した少年は、その恩を返すためにかつての自分と同じ貧しい子どもたちに、靴下に入れた贈り物を渡そうと考えました。贈り物と一緒に添えられた手紙には、セント・ニコラウスよりも書かれていました。こうしてニコラウスからプレゼントを貰っ

た子どもたちがやがて親になり、また自分の子どもにプレゼントを渡し、それがどんどんどんどん受けつがれて、いつしかセント・ニコラウスが、サンタ・クロース。ど？ 素敵な話でしょ？

ケン だからからないってことでしょ結局、サンタなんて。

アッコ みんなニコラウスの意志を受けついでの。つまり誰でもみんなサンタさんになれる。

ケン アっちゃんね、そうしてサンタになったおとんとおかんも、子どもが寝静まるとどうするの？ まずはそのコスチュームを脱ぎ捨てて、サンタの赤い衣裳に白いカルピスをぶちまける、これがほんとのホワイトクリスマスよ、

アッコ うるさい、ヘコヘコじじい、ヘコヘコできないくせに！

ケン じゃ試す？ 試してみる？ 性なる夜を、ぼくとアっちゃんの二人一緒に！

アッコ ◎◇※■！

ラジオをつけた男は、冷蔵庫を開ける……。

男 (冷蔵庫の中からシャンパンを出し) 意外に俗物だね。ケーキがない

ぶんましかけど。

女 (キッチン灯を消す)

男 景気づけに一杯ど？ どうせ来ないんだしタニオカは、

男は椅子に掛けられているタニオカのシャツを羽織る――そのとき、人形が床に落ちるが、女はすぐさまそれを拾い上げ、ベットへ……。

男 ……、

男はシャンパンを冷蔵庫へと戻し、代わりに缶ビールを取りだし、飲み始める。

男 (ビールを飲みながら) いいかい。これは勇気の問題じゃない。意志の問題だよ。最初だけさ。言つたろ？ 人間はそのうち慣れる。

バスルーム内で物音——ラジオはサンタクロース伝説……男  
はシンク内に投棄されていた包丁を手にする。

ね、

(制する)

女 男 女  
ねやめて、

男は口と鼻をおさえ、バスルームの扉を開ける——陽気に騒  
ぐラジオDJ……。

男 ……、(扉を閉め) 浴槽の蓋がたおれたんだ(包丁をふたたびシンク  
内へ投棄) だから今だけさ。なんでもなくなる。どっちみち長く置い  
とくわけでもないんだし。最初さえ乗り切れればさ。二人一緒なら。こ  
こが正念場だ。

女 あなたは、帰った方よくない？

男 ……、

女、ラジオを消す。

女 あとはどうにかする。

男 どうにかって？

女 ……、

男 聞くよ当然警察は。なんで彼の奥さんがあなたの家に。どう説明？

女 ……、

男 黙ってりや誰にもわからない。君は今日初めて遭ったんだ。なんの繋がりもない。疑うにも疑う理由がない。(バスルームを示し) どうにかしてあいつを消しちまえば――

女 だつていかないでしょ？ あなただつてずっとここにいるなんて、帰れつてどこに？ 今更どこ帰れつて？

女 来るんでしょ？奥さんの。週末は決まって。金曜。聞くでしょ？当然。うちの娘はどこに？ どう説明？

男と逃げた。

女 ……、

男 あいつはマンション内でも有名だった。派手好きで、ぼくに内緒で借

金だつて。ああそうさ。もちろん他に男をつくったことだつて。そう、みんな知つてた。家にいるときはずっと暇さえあれば鏡の前に座つて  
るような女。人生の大半を鏡の前で自分確認。何度も話し合つたんだ  
それで。毎日毎日。夜になるとね。「どうして」「どうしておまえはそ  
うなんだ」「どうして」。だからそうさ。実のところ感謝してるくらい  
なんだぼくは。あのままじゃぼくがやつてた。いつかきつと。確実に  
ね。

……。

男 女  
大丈夫。「今まで言えませんが彼女には男がいたんです。それで  
ぼくらは毎晩話し合つて、毎晩毎晩――

女 男  
じゃその日君はどこにいたんだ？ どう説明？  
なにその日つて、

奥さんがいなくなった日。聞くわ当然。

気がついたらいなくなつてた。いつかなんて知りません。

女 男  
オートロックなんでしょ？ エレベーターにだつてついてるんでしょ  
？カメラが。調べたらすぐにわかる。いついなくなつたのか、いつ出  
たのか、マンションを。

男 ……、

女 娘の結婚相手、興信所使って探りだそうって人でしょ？ 納得すると思っ  
て、そんな説明で、

男 高校の同級生。ぼくはその日、高校の同級生と逢っていました。

女 ……、クリスマスに？

男 現にそうだよ。

女 あなたはクリスマスに、娘を家に一人残して高校の同級生？ それも  
女性の、

男 くだらん、

女 でも理由がないと納得しないでしょ外の人は。もちろん義父さんだつ  
て、

男 だから現にそうだよ（ぼくらは）。ただの同級生。君にはちゃんと恋  
人だっている。毎週金曜日になると通ってくる恋人が。妻子持ちじゃ  
ああるがね。

女 じゃなんで納得しなかったの？ 奥さんは。あなたがあれだけ説明した  
のに。

男 あいつは特別なんだ。思い出せ。自分の考えがいつも正しいと思っ  
て

る。だから話にならない。

女 不自然だからでしょ？ なんの関係もない男と女がクリスマスの夜に一緒にいるなんて、

男 じゃ説明できるのか？ 君は。今、ぼくらがここにいる理由。世間的に言やあ恋人同士でもないぼくらが、今、ここに存在している理由、

……、

女 理由なんてない。だろ？

男 ならこう聞かれる。どうして理由がないんですか？ そして最後はきつとこう。本当は奥さん、男を作って逃げたりなんかしてないんじゃないですか？

……。

女 でしょ？

男、女を抱きしめる——女の抵抗——男は尚も女へと襲いかかり（レイプの体）——女はやっとそれを払い、室内灯をONさせる——。

男 どうして？ なら作りやあいだけさ、理由を。ぼくらが一緒にいてもおかしくない理由。外の連中にもわかる、わかりやすい理由をね！

女 (男を制し) ね…、

男 なに(！)

女 (床を示す)

床には点々と、血の足跡…、

男 …、なにこれ(？)

女 ね…、(男の足元を示し) 足、

血は男の足元から流れている…男は急に痛みをおぼえたのか、椅子に坐り込み…、

女 駄目、そのままよ。動いちゃダメ。

男 なんでもない、

女 駄目よ、

男 (手にしたガラスの破片をキッチンへと投げ捨てる)。さっきのコツ  
プさ、なんでもない。  
女 ……、あたし？ (さっきのコップ)  
男 ごめん。どうかしてた……。  
女 ……、  
男 すまない (女が投げ捨てた上着を止血のために自分の足元に巻きはじ  
める)、  
女 駄目よ、ちゃんと消毒しないと、  
男 大丈夫、たいしたことない (!)  
女 ……、  
男 君こそ動かない方がいい。まだ残ってるかもしれないから。  
女 (メガネを外し、床を確認) …… (ふと動かなくなる)、  
男 ……、なに (?)  
女 ……、

男が女の視線に目を会わせると、そこには、床に点々と刻印  
されている、男の血染めの足跡……

二人  
……。

ポタリポタリと蛇口の水がキッチンを叩く……。  
女は黒いゴミ袋から雑巾を取りだし、無言で床に点々と刻印  
された男の血の足跡を消していく……。

男  
……  
(それを見つめている)

「妻」、電話台に置かれている文庫本(『カモメのジヨナサン  
』)を開き、それを朗読しはじめる(男には「妻」の声も聞  
こえている様子)……。

女 (拭き終わり……) 靴下。一応履いた方よくない？  
随分見えない気がする。

女 ……、なにが？

男 雪。

女 ……。

男、煙草を吸い始める……。

男 たまに降っても、傘とかさすんだからこっちは。(笑って) 降ってる

のは雪なのに。だろ？

そうね、

男 (カメラを手にする) あの写真、残ってないの？

……、

撮ったろ、あの時。

……、ないわ。

なんで。

してないの、そもそも現像を。

なんで。

無理よ、持ってたって現像所に。あんな写真。

なんで。

女 (イライラと) なになんてって。

……、いい記念だった。

女 (笑う) なに、キネンって、

別に、

男 別に別について（！）

女 なんだよ、

女 どつちよ。いきなり雪がどうの写真がどうの。いいキネン？ それこそ俗物。

男、ラジオをつける——（DJと同時に芝居は進行する）。

ケン 男のおちんぽミルクと月一の女の子の日、

アッコ ぎゃあああああ！ おちんぽミルクってなによ！

ケン アっちゃん。白ははじまりの色なんだよ

アッコ なにそれ？

ケン どんな色でも引き立てる。だから白い雪で覆われた時、サンタは光り輝く赤を着てんだよ、

アッコ 嘘、ゼツタイ嘘、

ケン 他にもあるのこの組み合わせは。赤ワイン白ワイン、赤血球白血球、そして男のおちんぽミルクと、

アッコ　ぎゃああああ！　そんなもんと女の子の日を一緒にしないで！　ど

れだけ大変かわからせてやりたい、

ケン　手取り足取り教えてよお、

アッコ　男は痛みに弱いでしょ？　ケンちゃんなんかすぐ死んじゃうよ、

ケン　死ぬ前にオレのはじまりの白をアっちゃんにあげるよ、

アッコ　うるせえじじい！　へこへこできないくせに！

ケン　クリスマスなのにシコるしか能がない男子諸君！　街中のイルミネー

ションに、濃厚スperlマぶっかけよう！

アッコ　ぎゃああああ！　ゼツタイやるな！　ごめんね電飾職人さん、

ケン　その方がイルミネーションも光り輝くだろ？

アッコ　汚なすぎ！　街が濁る！

男　そうさ。これが世界だ。誰も気にしてない。ぼくらのことなんて誰も。

今日、ここで、何があったのかなんてことは誰一人だ。だから何も知  
らない。知ろうともしない。それどころじゃないんだ今日は誰だつて。

……。

男　タニオカだつて同じさ。君が今日、ぼくらが今日……、そんな時奴はな

にしてた？ 頭の中はクリスマスで一杯だ。どんなケーキを食べようか、どんなプレゼントを買おうか。で、ロウソクたてて、（冷蔵庫を開け）シャンパン開けてメリー・クリスマス！

男、ラジオを切る――。

男

いいかい。たとえね、いくらあいつの親が疑おうと、発見されなければ事件にはならない。それがこの世界なんだ。どんなに疑おうと。こつちが自然な振る舞いしてりや誰にもわからない。だろ？

女

あなたに出来るの？ 自然な振る舞いが。

男

（笑って）少なくとも君よりはね。

女

だって見えてるんでしょ？ 見えるはずのないものがあなたには今。

CUBE内を浮遊する「妻」……。

男

……、

女

でしょ？

電話の呼び出し音——男と女、動けず……。

鳴り続ける電話の呼び出し音……、

女 (ベットに上がり込み、布団にくるまる)

男 (その布団を剥ぎ) 誰だ？

女 知らない、

男 だつてクリスマスだ、

女 電話してくる友達なんていない、

男 だからタニオカだろ、

女 だからそんな人じゃない、

男 じゃ誰だよこんな時間に(!!?)

呼び出し音が止まる——再びおしつぶすような静寂……。

聞こえて来るカツンカツン……。

男 (室外に) 誰だ！

女 やめて、

男  
なんとか言え！  
女  
やめて（！）

足音、消えている……。

ふたたび文庫本（『カモメのジョナサン』）を朗読しはじめる  
「妻」……。

男  
（「妻」に）黙れ！  
女  
ね！（しっかりして）  
男  
……。

梟時計が時を刻んでいる……。

男  
古代人が、地球を平らだと信じたのは、目に見えるものだけで世界を捉えたからだ。でも事実は違った。時間と空間。宇宙レベルで言やあそれだつて絶対じゃない。ぼくらはあの時……。ぼくが記念つて言ったのは、そういう意味だよ。

女  
……。

男、トランクを手にバスルームへ——扉が閉まる。

女  
……。

女、ラジオをつける——ビートルズ「ゲットバック」……。

室内には「妻」のみ（ジツと閉じられたバスルームを見つめている）——ラジオのDJが陽気に騒いでいる。

アッコ ケンちゃんも戻らないと。元の場所に、ゲッドバック！

ケン アっちゃんのヴァギナに？

アッコ ◎◇※■！ なんでエ！

ケン 子宮回帰！

アッコ なんで!?! ケンちゃんいたら墮ろすよ！ ゼツタイ墮ろす！

女がバスルームの入口に現れる。全身の至る所が血で染まっている（以後DJと共に芝居は進行する）。

アッコ じゃなくてお家うち、お家に戻るの、ケンちゃんだってやるんでしょ？

ケン 女房とはもうやりませ〜ん、

アッコ じゃなくて子どものためにサンタさん！

ケン うちは駄目。教育方針違うから、女房とは。

アッコ 奥さーん、悪口言ってますー！

ケン ドクシン女にはわからないの。

アッコ え？ よく聞こえなかった、なあに？

ケン 親が責任もつて子どもを育てるって子ども中心主義は近代以降の考え

方よ。そもそも家族仲良くなつてのも人間の歴史から言やあついでこの

間。本来のあり方とは違う歪んだあり方なの。だから虐待とかネグレ

クトとか起きちゃうの。基本は失樂園なの。恋愛こそがホモ・サピエ

ンスの使命なの。

アッコ じゃああたしと失樂園しちゃう？

ケン 聞いたかりスナーの童貞ども！ アっちゃんのホールマツカートニー

にぶつといツリーぶつ刺して、

アッコ (同時に) あんあんあん、

ケン ワンダフルクリスマスタイムを過ごしたい奴は電話番号送ってくれ！

女に続き、やはり全身を血に染めた男が出て来て、持ってい

たトランクを室内へと放り投げ、椅子に坐りこむ……。

時計の針は、やがて午前三時を閉めそうとしている……。

男  
（自棄気味に）ドラエモン呼んで来てよドラエモン。

女  
……無理よ。運び出すなんて。

男は室内を物色しはじめる――。

女  
だからこれ（トランク）が無理なら無理なの（！）

男は飲みかけのビールを一気に飲み干すと、缶を握り潰して  
キッチン内のシンク内へと投げ入れる。

相変わらず陽気なDJがクリスマススイブを騒いでいる。

女、ラジオを消す。

男、ラジオをつける。

女、ラジオを消す。

男　なんで？　気がまぎれる。  
女　明日……。行くわ。  
男　…、行くつてどこに。

ポタリポタリと蛇口の水がキッチンをたたく……。

男　行くつてどこに（!？）  
女　大丈夫。あたし一人で行くから。  
男　……、

女、冷蔵庫から缶ビールを取り、飲む――。

男　逃げよう。二人で。  
女　（応えずビールを飲む）  
男　聞いている？　運び出せないならぼくらの方からここを出て行く。  
女　（ビールでゲップ）、  
男　わかんないよ黙ってちゃあ、

女 やったのはあたしなの。あなたじゃないの。

男 …、だからなに(？)

女 あなたはなにもしなかった、

男 なんて言われた？(バスルームを示し)あいつになんて言われた？

男 仕方なかった。自分を責めるな。悪いのはぼくだ。

女 あなたはなにもしなかった。

男 そうさ。なにもね。そうしてダラダラぼくは結果の見えない生活をた

だ続けて来た。気がついたときは手遅れさ(自分の足を示し自嘲気味に)こいつみたいだね、

女 殺したのはあたしなの。

男 言つたろ。誰がやったかは問題じゃない。それどころか感謝してるんだって、

女 殺したのはあたし。

ポタリポタリと蛇口の水がキッチンをたたく……

男 じゃなんで殺した？ 君がうちのを殺す理由はなにもなかった。なの

になんてだ？

……。

男 答えろ。なんでだ、

女 (そんなのわかるわけないでしょう(！))

男 君は思い出していた。違うか？ 外の連中にはわからない、二人だけの

世界の共有。(ポスターを示し) あの日、あの夜、

女 ワカラナイ(！)

男 …、じゃあ、無意識さ。我思う故に我あり、あんなもんは幻想だよ。

人間を支配しているのは無意識なんだ。君は無意識に望んだ、ぼくと  
こうなるのを。だから殺した。

女 (笑う) あなたには見えない筈のものが見えている。じゃあそれほど  
んな無意識の現れ？

……、

女 (ビールを飲む) あなたは成功者。あたしとあなたは同じじゃない。

男 …、なにそれ、

女 人気作家、そして奥さんはビル持ちの娘、充実した仕事、満ち足りた生活。一体なにが不足？ 一体なにが不満？

男 …、(笑つて一隅に立つ「妻」を見る) あいつの父親にもよく言われたよ。いい大人がなにを言つてる。もつと現実を見ろ、

妻 わたしはどうすればいいの。

男 …、本当の自由。それは金なんかで手に入れるもんじゃない。なことは君だつてわかつてる。そもそもがこの近代社会そのものが人間がでつちあげた人工物、幻想だ。赤ん坊を見たらいい。身体全体で喜びや悲しみをあらわしてる。あれこそが自由さ。赤ん坊こそが自由の体現者なんだ。

女 ……。

男 大丈夫、どうにかなる。この街で再会して以来、ぼくらは互いの人生には干渉すまい、そうしてきた。それがぼくらの暗黙の了解だった。でもそれは間違いだつた。続く筈はなかつたんだそんなことはいつまでも。そして今日、それは終わった。君が終わらせてくれた。だからぼくらは行動しなくちゃいけない。これはチャンスなんだ。ぼくも、君も、こんなハリボテみたいな世界から抜け出せる、逃げるつてどこに。

男 ……、

女 どこに逃げるの？

男 ここじゃないどこかさ。

女 (笑う)

男 なんで確かめない？ なんで端はなから無理だと決めつける？

女 だから終われないの、いつまでも(！)。そうしてずっと逃げまわる、

死ぬまですつと、

男 まずは逃げる。考えるのはそれからだ。大丈夫。二人ならどうにかな

る。二人、一緒なら、

女 (その気は微塵もなく) 宇宙船でも脱出する？ あなたが書いてる

男 出でみたいに。

女 ……、

女 なんだっけ、あの話。太陽系で発見された十番目の惑星？ でもその

星は反物質でできていて、そう、悪魔の星、魔王星。でもその星のエ

ネルギーを利用すれば光速ロケットの開発も可能になって、(大げさ

に芝居じみた身振りで) さあ、果たして人類はこの太陽系という「楽

園」に止まるのか、それとも再びこの「楽園」を飛び出すのか？――。

(笑う) …、出してよ。魔王星を今ここに。行きましょう、二人で一

緒に光速ロケット、宇宙の果てまで（！）

……。

男

梟時計が時を刻んでいる……。

女

話し合ったわ。何度も、何度も、あたしたち。金曜日に来る度に。「あたしたちはどうなるの?」「あたしたちはどうすればいいの?」「あたしはどうすればいいの?」……。あの人の言うことは決まっていた。「どうにかなる」……。毎週毎週、金曜日に来る度あの人は言う。

女は手にした人形をバラバラにしながら、

女

「どうにかなる」「どうにかなる」「どうにかなる」「どうにかなる」「どうにかなる」「どうにかなる」! !

女はそのバラバラの人形の破片を男に叩きつけるように投棄。

男  
……、

男はキッチンのシンク内にあつたの包丁を女へ――。

男  
じゃあ……死ぬしかない。だろ？

女  
遭わない方がよかつたんだわ、あたしたち。でしょ？

……。

女  
いいわ。(手を払げ) 終わりにして。

……、

女  
早く！

男は包丁を投棄――女はそれを拾い上げ、自身へ突き立てよう――男がそれを奪い取ろうと――騒然――男は女から包丁を奪い取る――。

女  
なんでよ！ 終わりにするんでしょ!? お終いに！

梟時計が三時を打ち鳴らす——静寂……間……。

男  
——！

男は女の傍らにあるクッションに包丁を突き通す——。

女  
……、

やがて男は何度も、何度もそのクッションに包丁を突き立てる——やがて男は奇声を発しながら、その包丁でボロボロになったクッションを手に取り、いたるところに叩きつける——  
——クッションの中の白い羽毛が室内に散乱する——。  
やがて男は力尽きたように、その場にぐったり……。  
静寂の中、白い羽毛が舞うようにして室内に落ちていく……。  
まるで……。雪のように……。

二人  
……。

男と女の二人、呆然とその舞い落ちる白い羽毛を見つめてい  
る……。

電話が鳴る——二人、動かず……。

クリスマス・イブの陽気な街の雑踏——ラジオのロコが突然  
高らかに響き渡る——。

ケン (オープニング) 起きろ——！ ニッポン！

アッコ 太陽が昇るまで、

ケン 眠れないあんたにお付き合い、

ケン と、

アッコ アっちゃん、

二人 チョベリグジヨッキー・オールナイトロング！

アッコ お手紙です。家畜人やプーさんから。

ケン はいはい、

アッコ 「ケンちゃんアっちゃんこんばんわ。明日地球が減ぶとしたら、最後

になにをしたいと思いますか」はい、ケンちゃん。

ケン 来ません。ノストラダムスは嘘です。

アッコ　ベルリンの壁だつて壊れたよお、ソ連だつて無くなっちゃったし、なにが起きるかわからないよおこの世界！

ケン　地下鉄サリンでわかつたでしょ？　所詮この世は終わらない日常。ハルマゲドンなんて来ません。つまり終わりはないの、永遠に。

アッコ　でも想像してみよ。明日がない。ロマンじゃない？　だつてなんだつてできるんだよ？

ケン　アつちちゃんとの失樂園も、

アッコ　オウムだつていつ復活するかわかんないよお、

ケン　じゃあアつちちゃん、

アッコ　なに。

ケン　恐怖の大王が降つて来た！　さ、なにする？

アッコ　結婚した〜い！

ケン　だから今降つて来てんの、恐怖の大王が、

缶ビールを飲む女が見えはじめる……、

アッコ　いいの！　あたしは全てが終わる前にちゃんと恋愛をして、子どもを

つくって家族と一緒に終末を迎えるの。誰かと一緒ならノストラダムスも怖くない！

ケン (格言風に) 女は常に未来を語る。

アッコ 望めば叶うの！ ジョン・レノンも歌ったよお、君たちがそれを望めば争いだって終わるんだ！

ケン なこと言ってつから殺されたんだよ、ジョン・レノン。って言うかさ、十四才が子どもの首切って学校の校門にサラしちゃう時代よ。充分ハルマゲドンだよ。

アッコ ケンちゃん、浅い！

ケン アっちゃんのヴァギナは深い！

アッコ ◎◇※■！ ああいうのは ケンちゃんが知らないだけで、なにかあるの、ふか〜い理由が、

ケン 文学的発想は嫌いな。殺しは殺しだからね。

アッコ だっけないのケンちゃんにも？ なんかもシヨ〜くに殺したくなるとき。奥さんとか？

ケン (格言風に) 女は男よりも常に野蠻である。

アッコ 問題発言！

ケン オレじゃないよ。ダニーチエだよ。だって中絶だって立派な殺人だからね。女の方が殺しは得意なんだよ。

アッコ 知らないよ、苦情が来ても。

ケン オレは決めたよ。

アッコ なになに？

ケン オレはジョン・レノンになる。そしてアつちゃんに殺される。

アッコ 無理よ。ズエツタイ。

ケン 聞いたか？家畜人やプー。アつちゃんのホルマツカートニーにぶつ  
といツリーぶつ刺して、

アッコ あんあん！

ケン ワンダフルクリスマスタイムを送りたいならこれを聞け。ビートルズ  
復活の曲、「フリー・アズ・ア・バード」(Mがかかる) まあ、なんに  
せよ、人は殺しちゃだめですよ、

アッコ あたしは殺しませくん！

女は、しきりにビールを飲んでいる。その足元には、飲み干され潰された缶が数個、すでに散乱……男は一隅にうずくま

るような恰好……。

白い羽毛は室内に散乱したまま……梟時計はすでに四時を回っている……室内は冷えきり、二人の吐く息も時折白い……。

女 (酔いが進んでいる風) あああ早く来ないかなあ、一九九九年。サト

ミが言ってた。向こうも降らないって、昔みたいに。

(女を見る)

女 電話かかってくんの時々。大体が旦那さんの愚痴。子どもはもう小学

校だって。(男を突つつき) ショックう？

…、なにが。

女 卒業アルバム。サトミ、おれは一生おまえを離さない。

……、

女 雪もそうだけど、マイナスだってせいぜい十度いくかないかだった。信じられる？ あの頃はマイナス二十度、三十度なんてザラだった。

これってさ、やっぱり着実に疲弊してるってことなんだよね、地球が。

男 ジョン・レノンだって歌ってた。なんだかんだ言って、世の中はいい

方向に向かつてる。

女 アダムとイブがりんごを食べた。それは「いい」こと？ 「悪い」こと？

男 ……。

女 (笑う) やめてよお、おセンチはあ。ね。誰だっけ？ ジョン・レノン殺した人。なんか変わった名前。『カモメのジヨナサン』だったか、『ライ麦畑でつかまえて』が愛読書でさ、

女 すまない、

男 ダメ。

女 ……、

女 これもサトミが言ってたわ。あなたは昔からそうだった。謝られるとね、女は悲しくなるの。第一あなたが謝ること？ そう。実のところ言うとおたしも感謝してるくらいなの。終わりにできたんだからこうして。なにもかも。

女、ビールを無理やり流し込む風——缶は空となり、それを潰して床へ投棄すると、ふたたび冷蔵庫から新しい缶ビール

を取り出す。

女

(男に)ダメね、女の独り身は。時間を忘れよう忘れようつてするとお酒ばかりが強くなる(飲む)。

ふと、女は思いついたようにラジオを消し、電話をダイヤルし始める――。

……、

女 男

(受話器を男に突きつける) 聞こえる？

それは二二時報……「ただ今より午前四時〇分〇〇秒をお知らせします……」

女

あたしね、一人の時よくこれ聞いてまぎらわすの。安心すんの。ああ、ここにもあたしと同じ人間がいるつて。

男

……、

女 知ってた？ これ人間の声なの。人間が言ってるの、一人で。あなた  
♫とか書いてんだからくわしいんじゃない？ コンピューターとか  
でどうにかならないの？ これ、

……。

女 男  
ね。なにかお話しして。今日が最後の娑婆の夜。気がついたら、それ  
こそ朝になつてるみたいなの。そう。魔王星。あの続きでもいい。楽園  
を飛び出した人類は、その後どうなるのか。

……。

女、受話器を戻す。

女 じゃあさ、あたしが聞くけどいい？ (動かぬ男をつつき) ねえ。  
なに。

女 本当はね、ずっと聞こうって思ってたの。この際だから聞いちゃうけ  
ど、感じたりするわけ？ 相手が男でも。

……、

女 (男の頭に缶ビールをかけ) ねえってば。

男 (ビールを払い、立ちあがって) 自由だよ。少なくとも女とするよりはね。

女 (笑っている) えなに? どういうこと?

男 簡単には言えないそんな、

女 作家でしょう? 言葉にしないとちゃんとお、

男 男がセックスによって女に隷属させられていることを思えば、少なくとも自由さ。

女 ∴、ふうん。じゃあさ、あたしも白状しちゃうけど∴、全然ダメなのあたし。いいって感じたことないの。一度も。

男 ∴∴∴、

女 なんか言つてよお、

男 メガネやめりやあいい。

女 ∴、(笑って) なにそれ?

男 変身願望のあらわれだろ、そういうの。

女 じゃああなたが化粧するの、あれは変身願望じゃないわけ?

男 女はね、なにを勘違いしたか外へ出る時に化粧をする。無害な自己表現。墮落だよあんなのは。

女 じゃなによ（あなたのは）、

男 化粧は誰かに見せるためにするんじゃない。尊厳だよ。ホモ・サピエンスに残された、最後のね。

女 （笑って）なにそれ？

男 （姿見の前に立ち）…、男にはね、もうそんなのは残っちゃないんだ。電気カミソリの発明がそれを奪ったみたい。化粧をしている時だけ、ぼくは女がうらやましくなる。

女 ホモ・サピエンスがそんなにエライわけ？ ……あたしは動物みたいに生きたかったわ。ずっと……。

鏡越に見つめ合う男と女……。

女 （ビールでゲップ）……。

女は飲み干した缶ビールを投棄すると、レコードを取りだし、プレーヤーにセット……やがてレコードプレーヤーがジョン・レノンを歌い出す……。

しばし動かぬ二人……。

女　ね。写真撮らない？（ポスターを示し）あの時みたいにな。  
男　……。

女、一眼レフカメラをテーブルへと置き、ファインダーを覗きこむ。

女　こっち向いてよ、

男　（女を見る）

女　動かないでね。シャッタースピード長いから。

女、シャッター（セルフタイマー）を押し、男の横に立つ。  
女は男の手を握る……。

男　……。

シャッターが切られる——二人、動かず……。

流れ続けるジョン・レノン……。

女 男 女

タニオカさんの顔が浮かんでたの……。あの時……。……。

自分でもおかしかった。だからあたし……。気がついたらあなたの奥さんに謝ってた……。なぜかワカラナイ。でも謝りたかった。だって、すべての原因はあたしなんだし。だから謝った——ゴメンナサイ。デモシカタナインデス、オワリニデキナインデス。ドウシテモ、ドウシテモオワリニデキナインデス。ゴメンナサイ——、

女

……。……、

つぶやくように、やがて男は「魔王星」の話をはじめ……。……。

電話が鳴る——。

二人  
……。

やがて女はレコードを止め、電話を取った……。

男 女  
……、  
……、誰？

女の手から滑り落ちる受話器——その受話器からかすかに聞こえてくる、興奮している様子の女の声。

声 「なんで黙ってるの！ 大体クリスマスまで一緒にいようなんてどう

いう了見してるの？ どんな女なのあんた。なんとか言いなさいよ。

だつたらうちの人を出しなさい。タニオカがそこにいるのはわかってるの。タニオカを出しなさい。タニオカを出して——、

妻 なんて黙ってるの。わたしは話し合おうって言ってるの。大間違い。

いつまでも続くだなんて思っているならこんなことが。なんとか言ったら。ならうちの人を出しなさい。そこにいるのはわかってる。あな

た。ワタシはどうしたらいいの？ 聞こえてるんでしょ。ワタシはどうしたら？ 答えて！

女、包丁で電話のコードをたたき切った――。

女

……。骨にね……。骨に、刃先があたったカンカクがね……。気がついたら、そのカンカクだけが残ってた……。そしたら、身体からスーッって、力が抜けてくみたい……。そう、あの時の気分。……「ア――」って。だからあたし――！

女（いつから見えていたのか）、「妻」に向かっていく――男はそれを制そうと――騒然――男は女から包丁を取り上げ床に投棄すると、女を羽交い締めするように抑え込む。

女

……。鍵をね……。鍵を返してほしい（――）。あたし言ったわ、あの人の……。あの人の、他にも何人もいた。あたしだけじゃなくて……。でもそんなことどうでもよかった。あの人が月曜日にどんな女のところ

に通つて、水曜日にどんな女のところに通つて、クリスマスを家族と一緒にケーキを食べようが、そんなこと、本当はどうでもよかつた……。ただあの人は、あたし以上にあたしを知つてた。それがあたしには耐えられなかつた。（「妻」に）終わりにしなけりゃ、終わりに。金曜日が来る度にあたし言つた。鍵を返して。金曜日が来る度にあの人は言つた。「どうにかなる」……。あたし思つた。このままじゃあたし、あの人に征服される。だからあたしは言つた。鍵を返して。あたしの鍵を返して。ワタシヲカエシテ！

キッチン灯（蛍光灯）が点滅をはじめた……。

遠く、雪原のジオラマが浮かんでいく……。

「妻」が文庫本（『カモメのジョナサン』）を朗読しはじめる。  
男はそれを打ち消すように「魔王星」の話しを吐露しはじめた――。

妻

――。

やがて浮遊していた妻、まるで電池が切れたようにその場に倒れこんだ——二人の脳裡に浮かぶ、音もなく降りしきる雪……。  
やがて、足音……。

二人

……。

よく聞くと、その足音はバスルームの中から聞こえてくる。

女

……つかれたわ。

男

そうだね……。なんだか、本当につかれた……。

女、床の包丁を拾い上げ、バスルームの扉を開ける——バスルーム内からの足音は続く……。

女

(それを見ている)……。

女、包丁を手にバスルームの中へ――。

男  
……、

バスルームの扉が激しく閉められる――遠く、北国の偏西風。

ケン (オーブニング) 起きろ——！ ニッポン！

アッコ 太陽が昇るまで、

ケン 眠れないあんたにお付き合い、

ケンと、

アッコ アっちゃんの、

二人 チョベリグジヨッキー・オールナイトロング！

アッコ っていうか、死んだらどこに行くんだろうね、

ケン ババアみたいなこと言ってるね。

アッコ なんてこと言うの！ だつて虚しくない？ なんにも残らないんだよ。

ケン ハルマゲドンは信じるのに魂は信じない？

アッコ だから魂だけつて虚しくない？ 一粒くらい残してよお、

ケン アっちゃんは物質の塊だよ、

アッコ 物質言うな！ 人間だ！

ケン だから人間だつて結局は物質でしょ？ 物質はね、無限に分割するこ

とはできないの。いくら細かくしてもゼロにならないの。つまり最小単位が存在するの。

アッコ みんな！ ケンちゃんが都市伝説言ってるう！

ケン ここにコップあるでしょ？ 中にはなにが入ってる？

アッコ なにもないよ。

ケン よーく見て。

アッコ ないよなにも。

ケン 空気はあるでしょ？

アッコ なにそれ！

ケン 空気はなんで出来てる？

アッコ 酸素とか？

ケン じゃ酸素はなんでできてる？

アッコ え、

ね？ アっちゃんにはなにもないように見えるかもしれない。でもそれはアっちゃんの目に見えないだけで、なにかは存在しているわけでしょう？（アッコ、納得の声）で、その見えないなにかを細かく細かく小さくするよ。どこまで小さくできる？

アッコ 1ミリくらい？

ケン だから1ミリじゃアつちゃんにも見えるでしょ。もつともつと細かくするの。

アッコ そんなの無限じゃないの？

ケン ってことは最後はなんにもなくなるってこと？

アッコ だからムナシイって話なの、

ケン でもさ、それおかしくない？

梶時計はすでに五時近くになっている。

浮遊していた「妻」の姿は消えている……バスルームの扉は

開け放たれており、しきりに水を流す音と同時に、男と女が

動く影が時折見える。

ケン なんにもないってことはサイズがないってことでしょうか？ ゼロって

ことでしょう？ それが物質の大元ってことでしょうか？ じゃあ今度

はその大元を集めてアつちゃんに戻すとするよ。でも大元がゼロなら、

いくら集めてもゼロのままでしょ？ どんなに集めてもアつちゃんに

はならないわけ。おかしくない？ だから最小単位は絶対に存在するわけ、この宇宙には。

アッコ  
なんの話だっけ？

ケン  
だからいくらアっちゃんを細かく細かくしたって、絶対に一粒は残るってこと。

アッコ  
あたしの一粒？

ケン  
この空間だって、細かくしていくとそうした一粒一粒できてるわけ。つまりこの世界は、そうした一粒一粒の相互作用が創り出しているわけ。それも偶然的。今流れてる時間だって、そうした偶然的の相互作用がつくり出したものなわけ。

アッコ  
え…、ケンちゃんって何者なの？

ケン  
アっちゃんの肉サンタだよぉ

アッコ  
わかった！

ケン  
えなに？

アッコ  
ってことはやっぱりこの世の中なにか起こるかわからない。でしょ？全部偶然なんだから。恐怖の大王だって降って来るかもしれないわけでしょ？

ケン  
アッコ  
そこですか！  
科学的事実よ！

D1の途中からバスルーム内から聞こえている男と女の声。

女の声  
ね？ まだ出る？

男の声  
出るねえ、

女の声  
疲れちゃったあ、腕。

男の声  
あ、(バケツが壁にぶつかる——転んだ風)

女の声  
気をつけてよ、すべるから。

男の声  
細かいのさ、いったん掻き集めよう。

下着一つの男が姿を現す……全身は血だらけ。

男  
(キッチンから空のタッパーを数個取り、バスルームの戸口から中の

女へ)全部入る？ こいつに。

女の声  
レジ袋あるでしょ？

男  
（キッチン引き出しなどを探り）…、どこ？

同じく下着姿の女が姿を現す…、同様に全身が血だらけ。

女  
（キッチンから、レジ袋を出す）はい。

男  
（手にして）意外と普通だね、こんなの集めて。

女  
あなたもね。

男  
…、（バスルーム内へ）

女は笑ってバスルームに向かって椅子に座り、煙草を吸い始める。

男の声  
（細かいそれを集めながら）包丁がいるね、もつと。

女  
切れないの？

男の声  
最初はよくても脂あぶらですぐダメになる。クロサワの「七人の侍」見なかった？（三船敏郎風に）「二本の刀じゃ五人と斬れん」そう言ってるね、三船が何本も用意すんだよ刀を。決戦の前にね。

女 買いに行けばいいわ明日。っていうか今日？ やっぱりお刺身用？

男の声 果物ナイフもだね。細かく切るにはそっちの方が便利だよ。できるだけ小さくしないとさ。

女 骨とかはどうする？

男の声 …、鉋かな？

女 キッチン売場にそんなの売ってる？

男の声 じゃ出刃かな。中華屋とかで使うやつ？（やがて戸口から顔を出し、タッパーとレジ袋を差し出す）ん。

女 なに？

男 だって入れるんだろ？

女 もう？

男 早い方がいいよ。その都度都度さ。いたんだりすると厄介だし。

女 そうね。

女、それが入った血だらけのタッパーやレジ袋を持ち、冷蔵庫を開ける。女は冷蔵庫内にあるものをすべて手で掻き出すようにして床へと投棄し、手にしたタッパーやレジ袋を冷蔵

庫内の冷凍室へ入れる。

女

あなたの言う通り。(男へ)ね。

男の声

ん？

女

臭いなんて最初だけ。

女はルージユを手になると、白い冷蔵庫の扉面に文字を書き込みはじめる。

女

(書き込みながら) っていうか、人間が都市で定住生活するようになったのなんてたった一万年でしょ？ 遺伝子レベルで言えばまだまだ所詮は動物なのよ、ホモ・サピエンスも(バスルーム内へ)。

冷蔵庫の白い扉面には赤いルージユで「Cogito ergo sum」。

女の声

ね。

男の声

ん？

女の声 やだこの人。靴履いたまま。

男の声 …、ああ、

女の声 全然気づかなかったわ、あの時は。

男の声 (靴を脱がしにかかっている風)

女の声 いいんじゃない？ 無理して脱がさなくたって。

男の声 (「うん、うん」呻りながら脱がしに——やっとな脱げる) ……、

女の声 やったわね。

男の声 うん。

男、バスルームの戸口に現れ、ソレが履いていたであろう靴を放り出す——カツンという音をたて、床に投げ出された赤いパンプス……男、ジッとそれを見ている……。

女 (顔を出し) どしたの？

男 ———!

男、キッチンのシンクへと走り——嘔吐……。

嘔吐が収まった男は、蛇口を開き自身の嘔吐物を流す――。  
女はジッとそんな男の様子を見ている。男は蛇口を閉める。  
ポタリポタリ……深海を思わせるような水の滴る音……。

男

（赤い靴を見ながら）こいつにはね……、借金なんてなかった。男だつていなかった……。派手どころか、質素でマンション内でも評判の女だった。（泣いている）……家に内緒の借金も、恋人がいるんじゃないかと噂されていたのも、……全部ぼくだ。こいつじゃない。みんなぼくだつた。……何度も話し合ったんだ。毎日毎日、夜になるとね。何度も……。夜が来るたびにぼくは聞かれる。「どうして?」「どうしてあなたは」……。聞かれるたびにぼくは答える。「どれか一つなんて選べない」「どうして?」「わからない」……。毎日毎日、夜がくる度。（女に）夜がくる度にあいつは言う「じゃワタシはどうしたらいいの」「ワタシはどうすればいいの」  
選ばないって選択肢だつてある。

男

……。

女

なにか一つを選ばなくちゃならない。そんなのがそもそも不自然。理

由を見つければいいの。あなたの奥さんは、男をつくってあなたを捨てて逃げた。あたしたちがそう思えば、それが「理由」になる。だってみんなそうしているんだから。でしょ？ 大丈夫。二人、一緒なら。

……。

女 さあ、やることやっちゃいましょう、陽が昇らないうちに。

男 うん。じゃあ、大物いこうか（！）

女 ヨッしやあ！

男 （バスルームの中へ）

女 気をつけてね。下、ヌルヌルしてるから。

女も、黒いゴミ袋を手にはバスルーム内へ。

男の声 ね、ちよつとひっばってみてよ。

女の声 （それをひっぱりながら） こ？

男の声 …、クソ（切れない風）

女の声 他んどこにしたら？ 明日出刃が手に入ってからで。

男の声 もつかい（一回）ひっばつてよ。ね。

女の声　ね、叩いた方がいいんじゃない？

男の声　たたく？

女、バスルームより出てきて室内を見渡す……やがてコードが絶ち切られた黒電話を取り上げ、バスルームの戸口に立ち、

女　これで叩くの。

男の声　どうやって？

女、黒電話を手にバスルーム内へ。

女の声　包丁ここにあって……、バンつて。

男の声　ああ。こ？

女の声　そ。

黒電話が内蔵しているベルと共に衝撃音――。

女の声　ど？　思いきりいけるでしょこれなら。

ベルと共に衝撃音——一回、二回……。

男の声　固えなあクソ、

女の声　もう固まってきてるのかしらね。

ベルと共に衝撃音——。

女の声　ね、足でやつちやええば？

男の声　足？

女の声　そ。

男の声　足、どうすんの？

女の声　乗っちゃうの、そのまま。

男の声　ああ。こういうこと？

女の声　そうそう。いっぺんに体重かけて。

男の声　だったら二人一緒にいこうよ。その方が重さもかかるし。息を合わせ

てき。

女の声  
せいので？

男の声  
うん、せいので。いくよ。

女の声  
うん。

二人同時に――「せいので」……ゴトンともゴロンともなんとも言えぬ音……。

女の声  
……。やったわね。

男の声  
うん。あとはもうそんなに苦労しないね。

女の声  
……。ね。

男の声  
ん？

女の声  
写真撮らない？ 記念写真。

男の声  
…、うん、そうだね。

女の声  
ちよつと待つてて。

女、バスルームから出て来てカメラを取る。

女  
……、

女、ふと姿見に映る自分の姿を見て……顔についている血を  
ルージユのように口にひく……。

男  
（バスルームから顔を出し）どしたの？  
女  
ごめんごめん、

女はバスルームに向けてカメラを構える——カメラの台にな  
るようなものを物色し、トランクをカメラの台にしてファイ  
ンダーを確認……高さが少し足りないらしく、冷蔵庫の辺り  
に投棄されているタッパーを二個ほどトランクの上に置き、  
その上にカメラを置いてファインダーをのぞく。

女  
ね、ちよつとガムテいい？

女、カメラ台となるトランクのタッパーをガムテープで固定

する……無造作に響くガムテープの音……この間、男はバス  
ルーム外へと出て来て、電話台に置かれている文庫本（『カ  
モメのジョナサン』）を手を取っている……。

女 （固定したカメラ台にカメラを置き、ファインダーから確認）いい感  
じよ。

男 （『カモメのジョナサン』を手にしたまま動かず）

女 どしたの？

男 マーク・チャップマン。

女 なにそれ？

男 ジョン・レノン殺したやつ。思い出したよ。愛読書は『ライ麦畑でつ  
かまえて』さ。

女 ……。

男 覚えてる？ やつもかけてたんだよ、メガネ。

女 ……、

男 取れよ（メガネを）。

女 ……、（メガネを取る）ど？

男 ……、いい感じ。ソレっぽくて。  
女 (笑って) なにそれ。ほんとに作家？ 動かないでね。  
男 ああ。

女、セルフタイマーをセットし、男の横に並ぶ。  
しばしの間……タイマーが作動……シャッター。  
二羽のカモメが飛び立った——舞い落ちてくる、まるで雪の  
ような白い羽毛……。

ラジオがジョン・レノンのクリスマスソングを歌っている。まるで雪化粧がほどこされたように、白い羽毛が室内を飾っている。その白い世界の中にかぶバスルームの扉には、アイヌ文化にあるような幾何学模様が血で描かれている。

テーブルには、細かくされた「妻」のソレが入っているであろうタッパーを真ん中に、バラバラになった人形がまるで物のように置かれる中、「妻」のソレで化粧をしている裸体の男と女……梟時計はまもなく六時を示そうとしている。

男と女、顔を血で装飾しながら……、

男 男の人の射精って、想像と違って意外とカワイイのね。

女 なにそれ？

男 君が言ったんだ。あの時。

女 あたし？

男 ホホエマシイだったかな。確かそんなようなとき。

女 はじめてだったのよあたし。サトミと間違えてない？ それ、

男 そのくせ君は、パンツだけは自分でぬいでた。それも後ろ向きでさ。

女 あれはけっこうよかったな。

男 そうだっけえ？

女 ぼくは全部覚えてる。あの時のことは全部。

男 ……。

女 (化粧の完了) ど？

男 いい感じ。あたしは？

女 ……うん。

男 どっち？ 作家でしょ、言葉にしてよちやんと。

女 ……うん。

間……やがて二人、笑う。女はラジオを消す。

男 (冷蔵庫を開けシャンパンを手に) 景気づけにどう？ 二人で。  
女 うん。

女、シャンパンの蓋を開けようと——シャンパンの口を男に  
向ける——男、逃げる——はしゃぐように男と女——やがて  
シャンパンの蓋が飛ぶ——二人が走りまわったりしたので、  
床の羽毛がふたたび舞い始める……。  
舞う羽毛を見る、男と女……。

男

……子どもの頃、朝、起きて、窓から外を見る。そうすると、まるで  
水平線みたい、真つ白い野原がどこまでもひろがっている……。あ  
の頃のぼくにとって、雪は奇跡だった……。昨日まで、確かにそこに  
あったゴミの山、大人たちの足跡。そうしたものをつた一日でこの  
世から消すことができる魔法……。ぼくは外に出る。そしてその、真  
つ白に染まつたなにも描かれていない雪の上を歩く……。ぼくの足跡  
が、一つ一つ、その白い野原に刻まれていく……。ぼくの歩いた新し  
い道。他の誰でもない、ぼくだけの新しい足跡……。するとね……。、  
親父がね、実にあっけらかんと雪かきをはじめらんだ。ザックザック、  
スコップで……。大人たちが歩くための道をつくるんだ。ぼくの足  
跡なんておかまいなしに……。ぼくはそれを見ながらね、なんだか、

とても嫌な気分になったんだ……。

間。

女　ね。今日あそこ行かない？　プラネタリウム。あたしたちが偶然再会

した渋谷の。一段落したら。

男　……。ヨッしやあ！

女、キャンドルの用意……。男もそれに倣う……。

男　（作業をしながら）あれ、どこだったっけ？　十勝川……。それとも

阿寒？

女　（笑って）覚えてんじやなかったの？　全部。十勝川。

男　クラスのことなんて覚えちゃないよ。

女　サトミが言ってた。あなたは昔からそうだった。

男　お互いさまさ。連中だってぼくのことなんてほとんど忘れてる。

女　なことないわ。人気あったものあなた、

男 でもなんで行ったんだっけ？ クラスで温泉旅行なんて。

女 マウラくん。それも忘れた？ 自殺したじゃない。それで、みんなで。

男 ……、そういえば君、マウラと、

女 (笑って) 覚えてる？ 「口避け女」がき、北海道に上陸したらしいつて。もしかしたら日高あたりは越えたんじやないかって、みんな盛り上がって……、でもあたしはそんな話にはなんか乗れなくて……、一人でビール飲んだ。

男 外を見ながらね。

女 ……、知ってた？ あのときがはじめてだった。あたしたちが話はなししたの。あなたいきなり来て言ったの。「逃げよう」。あたし聞いたわ。「逃げるって、どこに？」……。なんて答えたか、あなた覚えてる？

男 ……ここじゃないどこか。

女 ……。雪が降ってた。辺りは真つ暗。でも、目の前には真つ白な雪原。あたしたちは歩いた。足跡を刻みながら。そしたら遠くに……、ほんと、ポツンって感じで、小さな家があつて……、

男 農家の人がね、畑仕事の道具を置いたりする納屋だった。

すべてのろうソクに、焰が点灯された……。

女 知ってた？ あそこは昔、森だったの。シマフクロウの棲む森……。

男 シマフクロウ？

女 アイヌの守り神……。

男 ……。

女、室内の電灯を消す——ろうソクの焰の明かりだけに浮かぶ、男と女……。

女 雪の降る、あの静けさが好きだった。……気がついたら、なんの音も

聞こえない。……本当に、なんにも。雪が、すべての音を吸いこんで

……、空気の流れも止まって……。なんだか、暗い、宇宙に漂ってる

ような気分……。とても不思議な気分……。不思議な……。

…、なにが？

女 だって思わない？ カミサマは、なんのためにこんな……。だって雨

はわかる、必要だって。でも雪はどうして？

遠くジオラマ……そこにポツンと一軒、小さな納屋のような  
建物……その室内に明かりが灯る……。

男 鈍らないためさ、カンカクが。

女 カンカク？

男 ニンゲンとしての……、だってほら、雪を見てると、なんか感じるだ  
ろ、

女 なにが？

男 なんか……、アーって、

女 ……、カンカクを、感じるのね。

男 そうさ。カンカクをね……、アーって。

女 ……。

二人 (同時に) アー……。

間……。

女 ……、さつきまで、あなたの身体の中にあつた白い液体……。それが、

あたしのおなかの上でドクドクいつて……、あたしを暖めてる……。  
なんだかポカポカして……、とつても、あたし感じてる……。

遠く、北国の偏西風……。

男 女

……足、大丈夫？（痛まない？）。  
……。

男、少々びっこを引いている感はあるが、女に対してしっかりと歩いて見せる。

遠く、外で電車が走行する音……、かすかに……。

男 女

陽が昇るのね……、もうすぐ外は……。

……初めての東京。上野に着いたのは朝だった。太陽が昇って、東京がぼくの前に現れた……。そこから電車を乗りかえて、アパートに向かうんだけど……、街に切れ目がないのに驚いた。家やビルがどこまでもどこまでも続いて……。これはどこまで続いてるって……、ど

ここに終わりがあるんだって……、なんだかわからないけど、……ゾツとしたよ。

大丈夫。時間はあるんだから。

男 ……うん。

梟時計が午前六時の時を打ち鳴らした……。

女、冷蔵庫からタッパーを取りだし、テーブルへ。その半透明に透けて見えるのは、どす黒い血痕……。

テーブルに対峙する男と女……二人の血塗られた身体には、床に落ちていた羽毛が付着している……。

女 噛んじやダメよ。我慢するの。舌をうまく使って、少しずつ口の中で

暖めるの。そうすると皮が剥けてくる……。そうしたら、舌をつかつて、きれいに皮をはがして、そうしておいて、はじめて食べる……。

男 シヤリシヤリ……、だね？

女 そう。シヤリシヤリ。そしたら、嘘みたいに消えてなくなる。まるで雪みたい……。

女、タッパーを開ける……。

女  
メリー・クリスマス。

男  
メリー・クリスマス。

冷蔵庫の扉の隙間から漏れ出て来る、血……。  
カモメが飛び去る——ラジオが突然叫ぶ——。

ケン  
起きろ——！ ニッポン！

アッコ  
太陽が昇るまで、

ケン  
コギト エルゴ スム  
Cogito ergo sum

アッコ  
なにそれ？

ケン  
今日、アっちゃん食べていい？

アッコ  
◎◇※■！

遠く北辺の偏西風が吹きすさぶ——。

風が過ぎた後、電話の二七時報……続く……。

※参考資料は以下の通り。

『2001 夜物語 Vol.1』 第8夜「悪魔の星」 星野之宣・著／双葉社

『かもめのジョナサン』(新潮文庫) Richard Bach・著、五木寛之・翻訳／新潮社